

「第 71 回お花見レガッタ」
「第 32 回東日本中学選手権」
実施報告書

表件のレガッタにつき、下記の通り報告致します。

記

1. 大会名：第 71 回お花見レガッタ
第 32 回東日本中学選手権
2. 日 時：2022 年 3 月 25 日（土）～26 日（日）
集合 7:30
第 1 レース 9:00
最終レース 初日 15:54
2 日目 16:54
3. 場 所：戸田ボートコース（埼玉県戸田市） 1,000m
4. 主 催：一般社団法人東京都ボート協会
後 援：読売新聞社・日本オアズ・マン倶楽部
5. 備考
 - ・ 1000m 地点から 2000m を使用
 - ・ 信号発停装置使用
 - ・ レースは 6 分間隔
 - ・ 2 日目昼休みにオアズマンクラブ主催の慰霊レースを実施(選手の体調不良により中止)
 - ・ 写真判定装置なし（バックアップ用に ipad を使用）
6. 審判参加者
東京 27 名
神奈川 4 名 埼玉 1 名 栃木 3 名
香川 1 名 新潟 1 名 島根 1 名 計 38 名

★最上段部署長		3月25日(土)				3月26日(日)			
		午前		午後		午前		午後	
審判長		栗山 俊久	※	栗山 俊久	※	栗山 俊久	※	栗山 俊久	※
		吉野 泰宏	※	加藤 進介	研修	國光 正浩(審判指導)※		國光 正浩(審判指導)※	
		引田 周平		引田 周平		平木 健一	研修	油屋 晴美	研修
						櫻田 晋	研修	榊原 舞子	研修
発艇		長谷川 遼子		津川 剛		隈元 幸治		加藤 弘則	
		木越 健太		木村 嘉夫		油屋 晴美		田中 友理佳	
		勝又 真央		柏崎 美和		福北 良司		保泉 哲也	
		中村 麟太郎		武田 吉司		飯野 結衣			
線審		木村 嘉夫		油屋 晴美		関戸 裕子		津川 剛	
		照井 通恒		山本 雄司		加藤 進介		平木 健一	
		柏崎 美和		福北 良司		中村 麟太郎		土井 秀明	
		武田 吉司		大垣 圭子		勝又 真央		石原 亮馬	
		植野 颯太		飯野 結衣		石原 亮馬		渡邊 直樹	
M1	主審	乙藤 徹		平木 健一		加藤 弘則		長谷川 遼子	
	操縦士	正岡 久武		正岡 久武		土井 秀明		加藤 進介	
M2	主審	加藤 弘則		長谷川 遼子		成田 泰久		櫻田 晋	
	操縦士	金子 正典		中村 麟太郎		正岡 久武		正岡 久武	
M3	主審	隈元 幸治		田中 友理佳		乙藤 徹		吉野 泰宏	
	操縦士	野中 德行		木越 健太		武田 吉司		木越 健太	
判定		津川 剛	※	加藤 弘則	※	長谷川 遼子		隈元 幸治	※
		福北 良司		乙藤 徹		榊原 舞子		乙藤 徹	
		大垣 圭子		植野 颯太		保泉 哲也		木村 嘉夫	
		飯野 結衣		野中 德行		木越 健太		武田 吉司	
								勝又 真央	
舵手計量				薬師寺 朋美		田中 友理佳	※	成田 泰久	※
				金子 正典		平木 健一	(兼務)	油屋 晴美	(兼務)
						櫻田 晋	(兼務)	榊原 舞子	(兼務)
艇計量		田中 友理佳		隈元 幸治	※	津川 剛	※	関戸 裕子	
		山本 雄司		吉野 泰宏		吉野 泰宏		栗山俊久	(兼務)
		櫻田 晋		照井 通恒		木村 嘉夫		成田 泰久	(兼務)
		榊原 舞子		勝又 真央		渡邊 直樹		福北 良司	
		大北 勝圓	(水路)	大北 勝圓	(水路)	大北 勝圓	(水路)	飯野 結衣	
								中村 麟太郎	
不服審査委員会	※3名			※3名		※3名		※3名	
B級試験対策		國光 正浩(審判指導)		國光 正浩(審判指導)					
		平木 健一		櫻田 晋					
		油屋 晴美		榊原 舞子					
		加藤 進介							

7. 審判部署関連特記

(1) 審判本部におけるレースの目的

- ① 関東の選手が出漕する大会で、知識・認識不足による不利益を被らないようにするため、当大会を通じ2023年度競漕規則を各団体に周知し、同時に審判員も習熟する。
- ② 関東の審判員が、競漕規則に則った運営、考え方を身に付ける。
- ③ 大会運営は審判長、個々のレース運営は主審が行うという考え方を身に付ける。

(2) 全般

- ・2023年4月1日発効の新競漕規則にて実施

(3) 発艇

- ・発艇台船から信号発艇を行う（ブザー音は発艇マイクに收音して放送する）

(4) 線審

- ・練習水域監視及び900m付近回漕レーンとの合流地点でのマーシャル対応。

(5) 主審

- ・主審と操縦士を固定、主審はB級以上、操縦士は勝手に位置取りをせず主審の指示に従う
- ・主審はそのレースを主催するという意識をもち、発艇員、線審、判定員を統括する
例えばロールコールで発艇員がクルー名を誤った場合は主審が「発艇号令待て」をかけること
- ・棧橋監視ができないため主審艇にてD/W確認と艇計量指示を実施する
- ・雨天および気温が低い場合、転覆時にはすぐに救助することとする

(6) 監視

- ・今大会では舵手計量と艇計量を実施、艇計量にて抽出クルーに安全確認を実施。
- ・艇計量対象クルーの選出は、関東の1団体につき最低1回艇計量があたるようにする
- ・艇計量では、4月から徹底されるストレッチャーの確認と説明を行う

8. レース関連特記

・ 転覆

初日スタート直後、2日目フィニッシュ直後に発生。主審が対応し救助艇に引継いだ。

・ 舵手計量時刻遅れ

計量所の順番待ちの間に計量時刻期限を過ぎたクルー1件

→当該クルーに、自ら審判に声をかけないと期限切れで失格になることを指導

計量時刻に遅れそうな団体に学連から連絡を入れさせて未然に防いだケース2件

→シーズン以降は連絡しないこと、またJARAでは失格になることを指導した。

・ 艇重量不足による最下位付置(BUW)

昨年10件発生したBUWが今大会では1件もなし。

1×で14kgぎりぎりのクルーに対し、高温日での重量不足に備えるよう指導した。

・ ユニフォームの統一

アンダーシャツのラインの太さ不統一のクルーに対し、発艇、主審から指導。混成クルーの不統一は事前に競漕委員会に願い出ていた。（申請すれば認めると大会要項にある）

・ フォルススタート

発艇ブザー前にバウが漕始め発艇線を越えたクルーを線審からの連絡で発艇が止めた。

9. 審判関連引継ぎ事項

(1) フォルススタート時の信号発艇装置操作

東ボの信号発艇装置のフォルススタートボタンは発艇にしかないため、線審の鐘と赤旗動作で知らされた発艇員がフォルススタートボタンを押下したが作動しなかった。①フォルススタートボタンの不良 ②100mを過ぎランプを緑からニュートラルに戻して以降のフォルススタートボタンは無効 のどちらかが原因となるが、今回は発艇直後 50m前で一連のアクションをとっているため①の可能性が高い。しかし原因は特定できず競技本部にて確認することとなった。

(2) 線審

日本の競漕規則では、フォルススタート時には線審も鐘を鳴らして発艇員と主審に伝えることとしている。これは欧米のような「線審が直接レースを中止できる信号発艇装置を備えた常設コース」が日本にないことへの対応として日本で独自に採用したものである。これが WR 審判動作にないという指摘が一部の審判から出されていることを仄聞した。競漕規則改訂プロジェクトでは、フォルススタートを判断できる唯一の部署である線審が直接ブザーを作動させ艇を停止させることできない日本の状況を考慮し、発生頻度の極めて低いフォルススタート時でも発艇員・主審が少しでも早く艇を止め選手の負担を減らすことができるよう線審に鐘の動作を加えることとした。審判の動作を WR に合わせることに趣旨ではなく、日本独自の「発艇号令待て」号令と同様、日本の環境下でいかに選手を優先するかという考えに則ったものである。

(3) 主審

- ① 艇計量対象の高校クルーが伝達されたにもかかわらず計量所に向かわなかった。高校は配艇であることが多いため、計量所の場所も含め指示の仕方を工夫しなければならない。
- ② 待機位置が初日 300m でレースに横から入ることが頻発した。2 日目は 200m に改めた。
- ③ 審判 5 原則では公平より上に安全がある。主審は、艇どうしの接触による選手の怪我など危険事象が発生する可能性を防げる場所に主審艇を位置させることが必要である。また落水時にはレースの追航より救助を優先させる。そのうえで公平を担保するため、回漕中の待機審判艇を追航させるなど、主審どうしの連携が必要となる。

(4) 判定

- ① 東京都ボート協会は写真判定装置を設置していないため目視判定を正としている。また審判の判定を補完するために ipad でも録画をしている。男子エイト決勝レースでフィニッシュライン上で 1 位明治を 2 位中央が刺したかに見えた。着順確定後、中央大クルーから動画を公開する様、要請があった。クルーにはあくまでも動画は補助であり、審判の判定が正であることを説明の上、画像を公開した。
- ② 動画のバックアップと写真判定装置の違いは、動画はどちらが先にフィニッシュラインを通過したかを再確認するもの。従って同着も十分にあり得る。しかし写真判定装置は 1 センチ・1 ミリ単位で勝敗に優劣をつけるためのもので動画とは趣旨が全く違う。
- ③ 着順表記入時の注意 (6 ハイレースの場合)
転覆などの途中棄権 着順「—」 備考(欄外)DNF
決勝での途中棄権 着順「6」 備考(欄外)DNF ※DNS も同様

(5) 艇計量

- ・ 棧橋監視がないため艇計量所にてピックアップされたクルーの安全確認を実施した。
- クイックリリースストレッチャーについては一部を除きほぼ問題なかったが、ヒールロープ

については、①ヒールロープがない、②結んでいない、③結んでいるが緩すぎて機能しないというクルーがおおよそ全体の1/4にも上り、指導を行った。

- ・ 昨年は10クルーがBUWとなったが、昨年から艇計量を導入したことが奏功し、本年は1件も発生しなかった。ヒールロープについても同様に今回の指導で効果が表れると考えている。
- ・ 艇計量器の表示が小数点第2位までとなっている。この場合は切り上げて小数点第1位までとし、艇計量結果表には小数点第1位の切り上げ結果を記入する。

(6) 舵手計量

- ・ デッドウェイトの作り方の注意点
デッドウェイト分割作成の場合は、デッドウェイト連絡票に必ず何個口なのかを記載、またデッドウェイト本体にも2個口なら、それぞれ1/2, 2/2と明記する。棧橋監視や主審がデッドウェイトを確認する際には目視確認となるため、いくつあるのかが重要となるのである。
- ・ 舵手計量器の表示も小数点第2位までとなっている。この場合も切り上げて小数点第1位までとする。デッドウェイト連絡票にも小数点第1位の切り上げ結果を記入する。
- ・ 切り上げ結果が整数になった場合も必ず小数点第1位で記入する。 ×12kg ○12.0kg
(12kgと記載すると、12.0なのか、1.2なのかを誤認する可能性があるため)

(7) その他

① 無線の使い方

顔が見えない無線機では話し方も重要である。審判5原則に対等、連携とあるように、簡潔に話すからこそ相手を詰問するように聞こえる話し方にならないよう配慮する。

② 関東審判研修会

当大会では研修会を兼ねている。レースと並行しB級試験対策を実施した。國光副審判長が教官として東京3名、栃木1名、香川1名の受験予定者に指導を行った。三菱養和会に宿泊するC級勉強会対象者が1名しかいなかったためB級の座学に合流させた。

③ 東ボ審判服務回数表彰（敬称略）

25回表彰（赤バッチ授与） 土井

(8) 所管

- ① シーズン最初のレースとして、関東の選手に規則を浸透させることを主眼として取組んだ。今回ははじめて大会前3月5日に競漕規則の説明会を実施し、また大会中は艇計量に全所属団体を抽出、計量所の監視業務にて安全確認を周知した。知識不足で失格、除外になっても参加費の転用でOPEN参加で出漕できるよう配慮しているが今回はその適用はなかった。
- ② 朝9時からの6分間隔のレースであるが、転覆などイレギュラーがあるとその回復が難しい。空きレース時間を詰めたスケジュール作成、出漕数が少ないレースどうしの同時間スタート化などの工夫、またレース開始を8時半に繰り上げる、などをしないと、日没までにレースが終了しなくなる危険性があると感じた。
- ③ 大会終了後、体調不良者が出た。大事には至っていないが、インフルエンザやコロナに限らず備えは必要なので、せっかく習慣化した検温を継続したほうがよいと感じた。
- ④ この大会をもって審判長を交代する。新体制は次のとおり

2023年3月31日まで(旧体制)

審判長 栗山 副審判長 國光 成田 吉野 事務局長 山崎

2023年4月1日以降(新体制)

審判長 吉野 副審判長 成田 薬師寺 長谷川 事務局長 山崎

なお、栗山、國光は藤田とともに3名でアドバイザーとして審判本部をサポートする。

【今日の競漕規則】

第11条(艇最小重量等)細則

7 艇計量に使用する計量器の数値は0.1キログラム単位で表示され、結果は、直ちに判明する仕様とする。なお、小数点第2位が表示される計量器の場合は、第2位を切り上げる。

第25条(舵手体重)

3 計量に用いる機器が、小数点第2位以下まで表示するものである場合、その第2位以下を切り上げるものとする。

第43条(スタートエリアにおける主審の優位性)

スタートエリアにおいて、発艇員および線審は、特別に与えられた権限・任務を除き、主審の判断に従う。

10. 集合写真(大会2日目 初日は雨のため撮影できませんでした)

